

支那近代工業化を繞ぐる諸問題

横 田 弘 之

- 一 支那近代工業化の發生過程
- 二 支那近代工業化についての對蹠的見解
- 三 支那近代工業化を繞る地域・資源・勞働力
- 四 支那近代工業化と立地問題

一

支那國土の自然的基礎が、おのづからその生産様式を特定化し、現在、所謂アジア的生產様式なる呼稱をさへ敢て受けて居る有様にあるが、それは支那本來の性格に基く、主として農業的なるものに向けられて居ることには異論の餘地がない。而も右の生産様式こそは、所謂現實的な生産過程、即ち人間と自然との、その時々「物質代謝」の本質的な要素の全體たるものであると同時に、それはまさに、一定の社會時代の具體的な

總生産過程に於ける、物的及び人的生産諸力の統一體でなければならぬ意味に於て、吾々は所謂イースト¹⁾の高調する如き、地理歴史的な綜合性の明確な把握が、支那についても矢張り重視せられねばならぬことを覺えてくる。

とまれ人間は、その地理的自然の影響を、單に受動的にのみ受けるのではなく、寧ろ逆に積極的に人間は、自然の性質を利用し變革して、所謂自然の支配並びにその征服をさへ目指して居るものなのである。こゝに始めて人間社會と地理的自然の正しき交互作用が生れ、その中間項としての、尊き人間労働過程を媒介せしめることとなる。従つて地理的自然の良否のみが、人間社會の進歩を決する原因ではなくして、寧ろ人間の自然に對する反作用たる、その技術力の發達こそが決定的要因となるのである。確かに地中に埋藏せる富源は、そのまゝでは死物に等しく、それが技術力により、發掘加工せしめられてこそ始めて社會進歩の要因となり得る。斯くして吾々は、その發展的な人間社會の、技術的面の一つを擔ふべき、所謂工業問題の重要性を認識せざるを得ないこととなる。

この様な意義に基いて、吾々は、支那國土そのものの中に存する「工業」を茲に取り擧げて知るならば、確かに夫はその歴史性に制約せられつつ、長い變轉進歩の諸段階を經過せるものなることを吾々は識ることが出来る。だが特に今、吾々の對象とすべき所謂支那近代工業化は、果してそれらの發展段階に於ける何時の時期を以て明瞭に劃すべきものであらうかが先づ茲に重要な問題とならなければならぬ。之について吾々は、世

上に於ける多くの諸説を聞くことが出来る。即ち、グルーシヤコフは、「支那に於ける手工業は外國人の入國まで唯一の工業生産様式であつた²⁾」——と述べ、G・クラアクは、「支那の近代工業もその他の近代的發達と同様に、李鴻章の創意に成るものであり、彼は一八八八年上海に綿布工場を設立した³⁾」——と説き、次いでかのG・E・ハツバードは、「支那に於ける近代工業化は日本よりも約二五年遅れて行はれた⁴⁾」と前提しつつ、「それら近代工場の發達は一八九五年の日清戦争の結末に基く、かの馬關係約以來のことである⁵⁾」——と稱して居る。尙獨乙のペルニツチ博士も、「支那の新式工業は一八九四、五年の日清戦役以來開始された⁶⁾」——とその高著の中に明瞭に述べて居る如きであるが、通説としては、矢張りハツバードの述べるが如く、馬關係約以來、所謂外國諸工業の支那開港市侵入創設が認められた時期とするのが、より妥當なものではあるまいかと思はれる。

尤も嚴密な意味に於ける支那の新式工業乃至近代工業は馬關係約を契機とする遙か以前、既にかの一八四二年の鴉片戦争に起り、その正式開始の時期を以て同治初年となして居るが、未だその初期に於ては、完全な封建的官營的な軍需工業として發展し、主として北洋大臣李鴻章及び湖廣總督張之洞により、夫々紡績、造紙、織布、棉糸、麻、絹糸布方面に擴張せられつつある情勢にあつた。だが一般社會的基礎産業に對しては、何等の變革を及ぼさず、従つて支那はその相次ぐ近代工場の設立にも不拘、依然として他面に手工業や家内工業、或はヤニユフアクチユア等の分野が廣汎に存し、いはばそこに近代式な軍需工業と對蹠的な畸形的現象を示す

實情にあつたのであるが、既述馬關係約を契機として漸次近代工業の一般化に及び、その情勢も著るしく變化せしめられるに到つたのである。即ち、同條約の第六款第一項に於て、現今支那の已に通商港として開ける處以外、更に通商港として沙市、重慶、蘇州、杭州の如きを加へ、日本臣民の往來居住し、商業、工藝、製造に従事することに便ならしむる規定を記載したのであるが、之等は既に存してゐた最惠國約款に基いて、諸外國もその利益均霑を要求し來たり、又工業投資權をも擧つて奪取することとなり、茲にいはいはば外來的新式工業の驚くべき發展とその傳播が見られるに到つた譯である。

以上の前提を基本として吾々は、斯る支那近代工業化の發展過程に關し、その最も代表的な意見とも謂はるべき、かの G・E・ハッバード自身の所説の概要を、茲に暫らく縷述し、以てその批判的な考察を深く進めてゆくことと致したいのである。即ち、彼は先づ支那の近代工業化は全く偶然の出來事であり、その最初及びその後の發達は、全くその外國貿易に連繫依存して居り、事實上十九世紀に入る迄の支那には、マニユファクチュア以外の何物もなかつたと述べて居るが、而もそれらの近代的製造工場が、かの馬關係約を契機として先づ日本により、その開港市及び公開都市に於て建設されるの權利を獲得されて以來、所謂最惠國約款の下にある西歐諸國にも、自動的にその効力が發生したが、その後それらの影響により、支那近代工業は頓に熾烈化し、主として紡績業にあつたが、而も尙、製粉、油脂、石鹼、硝子、製紙、燐寸、烟草、蠟燭工場等も漸く興起する状態となつて來た。¹¹⁾特に彼がそれら新式工業化上の一般的障害として、所謂政治的原因を擧げ、直接

の機能を有すべき中央政府の無能力、各地方通信網の不完備、地方税に基く物資交流の不圓滑、全國單一通貨媒介の欠如、國內工場の二分化即ち外國所有工場と支那所有工場等を列記して居り、¹²⁾之等の故にこそ忍耐力に富み、勤勉且つ手先器用、敏捷性等の長所を有つ支那労働者も、その力量を十分發揮することが出來ず、いはばその國家的不統一、陋習、傳統の弊害を強く指摘して居るのである。¹³⁾而して彼は之等の對策として、先づ外國の技術力、援助、便宜等を得べきことを高調し、日本の如く外國貿易を獎勵し、外國技術力を修得せしめ、又は外國技術者を招聘して、以て啓蒙すべきことを力説してゐる。¹⁴⁾だが結局それらの根本問題として、特に支那そのものの平和と秩序の二要素が望まれ、更に從來の陋習ともいふべき傳統、例へば擄取として有名な手數料制、面子の問題、同族登用等の根絶を計り、而も若しも支那人自身の智力的な變化の無い限り、少く共今迄の永い傳統を破棄し、以て西歐思想の採取置換とその實踐の上に依存せしめ、特に支那工業の中に西歐的要素を攝取すべき問題に歸せしめて居るのである。¹⁵⁾斯くて彼は、支那及び西歐諸國との協調的連結を以て、その有望な進歩手段と考へつつ、次の如きA・サルタア卿の報告書を引説し、¹⁶⁾以て支那工業政策の基本方針となして居る。

- (1) 十分なる國內市場を確立すべき工業の擴張とその積極化。
- (2) 支那が特別の便宜を持つ輸出關稅の制限。
- (3) 比較的小資本に要求する工業の採擇。

(4) 支那農業生産物と鑛業資源についての工業開發。

尙彼は支那本來の土着民による、所謂民族工業たるべき農村工業についても深く着目し、¹⁷⁾ それら農村工業は、必ずしも大規模都市工業の代替とはならぬが、或場合に於てその補充をなし、例へば染色とその仕上げと云つた工合に、都市の製造家によつてなされたるものを、農村の家内工業労働者に手渡すといふ過程が、織物工業等によく見られると説いてゐるのである。¹⁸⁾ その他近代工業化につき、労働力一般の特質を記してゐるが、之については後述することにした。そこでハッバードは、以上の總結論として、第一に矢張り從來の如く、支那及び外國所有の二種の混成工業組織の繼續を主張し、第二には、所謂條約開港市及び公開都市制度下に於ける、特に外國工業の人為的發達を、支那全般工業の指導的意味に於て高調し、續いて第三には稍細く、國全體の發達としての一部たる工業のそれを目指し、特に鐵道の建設、外國の融資等、財政及び交通技術力、その他外國との諸種の協力問題を取擧げ、更に細目に互つて次の如き事項を記して居るのである。

(1) 平和と法律と秩序との確實な保證。

(2) 特に鐵道に關する支那の信用程度の向上。

(3) 支那發展計畫實現に關し、協同的に盡力すべき各國の夫々の行動につき、特に太平洋方面に關する列國相互の忍耐力の必要。

(4) 治外法權問題の撤廢と、特殊外國權益に對する支那敵對行爲の解消。

而して若しも之等の諸方針にして成功的であり、實現容易ならば、支那の経済的刷新更生も亦必然であり、その近代工業化の前途も亦甚だ有望であると斷言して、彼は強く彼自身の言葉を結んで居るのである。²⁰⁾

- 1) W. G. East, *The Geography behind History*, 1st. ed., London 1938.
- 2) グルーシヤコフ原著西尾・西澤共譯「支那の經濟地理」五九頁。
- 3) Grover Clark, *Economic Rivalries in China*, London 1932, p. 78.
- 4) G. E. Hubbard, *Eastern Industrialization and its effect on the West*, Chapt. III China, London 1935, p. 181.
- 5) *Ibid.*, p. 186.
- 6) Dr. Max Gerhard Pernitzsch, *China*, Berlin 1940, S. 56 (Kleine Auslandskunde)
- 7) 南支那及南洋調査第百六十三輯「支那最近の工業並に財政」一六頁。
- 8) 同書 二四頁。
- 9) G. E. Hubbard, *ibid.*, p. 181.
- 10) *Ibid.*, p. 186.
- 11) *Ibid.*, p. 187.
- 12) *Ibid.*, pp. 193—194.
- 13) *Ibid.*, p. 194.
- 14) *Ibid.*, p. 194.
- 15) *Ibid.*, p. 230.
- 16) *Ibid.*, p. 233.
- 17) *Ibid.*, pp. 196—198.
- 18) *Ibid.*, p. 197.
- 19) *Ibid.*, p. 205.
- 20) *Ibid.*, pp. 237—239.

二

以上の述言に基くハツバアードの意見は、あく迄も支那の近代工業化を以て外來的のものたらしめ、西歐の

力に依存せしめつつ、そこにいはゞ民族的土着的工農發展化に基く、産業革命により齎らさるべき自然の進歩的な形を認めて居らぬことは明白である。斯くして支那工業は全體として、未だ産業革命を經過せず、産業革命以前の段階にあり、その姿に於て支那の資本と労働とが、外國資本に利用され、且つ在支外國工業の發展のために直接間接に役立たされつつあることとなる。而して之等こそ支那母國にとつての最大不幸以外の何物でもないと絶叫して、痛切な言を吐いたかの劉振東は、その論稿「支那の國防經濟政策」の中に、「今日に於ける支那經濟の痛は外資竝に外貨の壓迫にあり、而して外資と外貨の壓迫に抵抗して民族經濟の復興を圖る道は、一に國內生産力の増進に懸つてゐる。……對外交通が開かれてより、西洋の經濟文明に驚き、銳意外國の大規模生産事業を模倣して支那固有の小工業を愛護することを忘れ、それを破壊に任せたる結果、資本及び人材の欠乏、社會的環境竝に數千年の習慣に適合せず、新しきものの未だ樹立されざるに舊きものは既に打破されたことが、今日の慘局を醸成せしめたのである。吾人は固より大規模事業の創造と發展に反對するものではなく、寧ろその發展を促進せしむべきである」と考へてゐる。但し八十年間歐米の模倣に努めた結果が、徒らに國內經濟を衰退させ紊亂に陥れたことは、否認し得ない事實である。¹⁾——と述べてゐる。尤も之等とは全く逆に、寧ろその善良な解釋を以て、右の近代工業化は單なる外國經濟の侵略的壓迫に基くものではなく、支那自體の本來的態度たる、いはば以夷制夷の見地より、外國工業の進出を利用し自國開發の一助たらしむべく大いに歡迎援助したものと看做すものや、又はその政治的不統一が國民の資本を十分に守り得ず、そのために外國勢力の

下に自己の安全を求めんとして、それらの侵入を援助せんとする傾きもあると解して居るものもあるが、矢張り支那を害するといふ前者の意見が一般的に強いものと吾々には考へられる。既にハッバードとは、まさしく對蹠的持論を示してゐた、かのトーネイ教授は、支那の外來的近代工業化の困難性とその不當性とを擧げて、實に興味深い言句を隨所に吐き散らしてゐたのである。即ち、「支那は大體に於て農民及び手工業者の國であり將來も亦永くさうであらう。支那の昔からの經濟制度の力を無視することは、大きな判斷の間違を起す原因であらう²⁾」。「若しも支那が歐米の産業文明の成果に眩惑されて、自分自身の道を打開いてゆかずに、之をただ模倣しやうとするならば、それは大きな過ちであると云ひ得やう。支那は既に存在して居る自分自身の經濟的基礎から出發しなければならぬ。そして支那に最も適してゐる所の最善の條件を持つ産業を發達せしめ、又支那が既に所有してゐる所の特長を發揮せしめてゆかなければならぬ³⁾」。「果して支那は産業の近代化を欲してゐるのであらうか。それとも支那の眞意は、もつと複雑なものであるのだらうか。即ち、西洋の技術を單に一つの道具として採用して置き乍ら、此の技術の背後にある西洋思想の侵略に抵抗しようとしてゐるのであるか⁴⁾」。「支那人の様に成熟した慎重な國民は、容易に測り知られない深いものを持つてゐる。彼等の眞意は言葉よりも寧ろ生活の上によく現はれてゐる。支那は新奇なものに眩惑され押し流される程幼稚な社會ではない⁵⁾」——と。斯うした見解は、更に例へば方顯廷や錢亦石にも堅持され、所謂外來の近代工業に抗して、支那本來の民族工業たるべき小規模農村工業の確立を叫んだのであるが、之等はいづれも支那工業の基礎支盤としての

本來的農業に關聯せしめ、その勞働力の源泉地及び製品消費の一大市場として、農業問題を重視してゐた譯であるが、奇しくも今を去る一六五年前、かのアダム・スミスによつて説かれた如き、支那の農業は、その商工政策の振興によつてのみ生きてくるといふ考察と、その相互關聯の中に極めて適切なる眞理を思はしめるものが多いのである。

以上の如き、いはばその極端をゆく二大對立的意見の存するにも不拘、矢張り支那は、一面に於て、その外國より蒙むる幾多の思恵に對し、あく迄も謙虛な態度を以て感謝すべきものではあるが、他面西歐諸國が、その惠與せる自己の思義の故に、道議的な觀念を離れて、いはば侵略的な意圖の下に支那を殖民地化し、その經濟的利益を壟斷せんとするならば、支那は斷平として之を排撃すべく大いに起つべきであらう。斯くして今こそ、その積年の歐米帝國主義的、高利貸的、商業收取關係より、東亞の土着民を速かに解放し、その民族の經濟を一層鞏固にし、以て本來の民族工業隆起に向はしめることこそ、いはば今次に於ける大東亞聖戰の高き目標の一つなのである。尙新聞紙の傳ふる所によると、戰爭開始以來、その自然的結果として、對支投資五十億圓に上る巨額の米英資金が、凍結せしめられることとなつたのは、實に意味深い所と考へ得られる。

- (1) 編譯彙報第七十一篇(昭和十六年八月)「支那の戰時經濟問題」六二一—六三頁。
- (2) R. H. Tawney, *Land and Labour in China*, London 1932, p. 145.
- (3) *Ibid.*, p. 135. (4) *Ibid.*, p. 130. (5) *Ibid.*, p. 131.
- (6) A. Smith, *Wealth of Nations*, ed. Cannan, vol. II, p. 175. 尙興亞教育第一卷第三號拙稿「アダム・スミス支那經濟觀

の吟味」参照。

(7) 昭和十七年一月六日讀賣新聞。

(8) C. F. Remer, Foreign Investments in China, New York 1933, p. 76.

Foreign Investments in China, 1931

By Creditor Countries-Percentage Distribution:

	1931	Millions of U.S. Dollars	Per Cent of Total
Great Britain		1,189.2	36.7
Japan		1,136.9	35.1
Russia		273.2	8.4
United States		196.8	6.1
France		192.4	5.9
Germany		87.0	2.7
Belgium		89.0	2.7
Netherlands		28.7	0.9
Italy		46.4	1.4
Scandinavian Countries		2.9	0.1
Total		3,242.5	100.0

支那近代工業化を繞ぐる諸問題 (横田)

三

支那近代工業化を繞る地域問題について、先づトーネイ教授は、「近代工業は一定地域のみ限定されてゐる。工業國としての支那は、沿海地方、鐵道又は河川の便宜を有する内地及び奥地、この三大地域に分れる」——と述べてゐるが、その質的乃至量的方面に於て、支那近代工業の大部分を構成してゐるのは、たしかにその中の主として沿海地方たる事は明白なのである。而してこの事は結局グループンヤコフの謂ふが如き、外國人資本とその近代化された工場とが、その特權を思ふ儘に振り翳し且つ外國守備隊や外國軍艦の保護を受け易い、いはば沿海地方の中心地及び航行河川の河口沿岸を占める、開港場及び外國租界の比較的小區域に、大部分集注する事となり、まさに全土の僅か一〇%の面積を占め、全支那人口の三六%を有する江蘇、湖北、廣東、山東、河北の諸省に鐵鑛業と炭鑛業の三分の二、製油業の五分の四以上と纖維工業の十分の九以上が存在してゐる事となり、又最も近代的な發達を遂げた近代工業部門の紡績業が、上海（五五・八%）青島（七・八%）武漢（七・三%）天津（五・七%）無錫（三・四%）の五ヶ所に集注する事となつたのは極めて興味深い所であらう。

斯かる外國侵入の歴然たる根跡を示すべき、近代工業化に關する支那國土の地域的發展状態にも不拘、支那には尙ほ固有の工業發展地域として囑望されるものゝ尠くない事は慥かなのである。即ち從來の策定地域とし

て普く知られるもの、若干に、例へばクレッシイ³⁾の所謂支那將來の大規模工業發達の豫測地たるべき、揚子江
谿谷地帯と北支平野の西方縁邊があり、カザーニン⁴⁾の如きも特に揚子江デルタ、河北省東北都、山東省の東部、
湖南湖北各省地方、西江デルタ、雲南省南部、湖南河南各省の北部及び各大都市の夫々の小工業區、江西省の
南部、四川省の西部にある手工業區等を示してゐる有様である。

總じて支那に行はれつつある各種近代工業は製鋼、鐵工、煉瓦、瓦製造、硝子、セメント、燐寸、紡績、綿
織、製絲、絹織、毛織物、針織、皮革、粉末、製粉、搾油、製茶、煉土等の諸製造工業に及んでゐるが、此等
は主として南京、上海、青島、北京、無錫、抗州、漢口、重慶、天津、濟南、厦門、梧州、廣州、汕頭を中心
として活潑な活動を示してゐる事は事實であらう⁵⁾。而して此等工業諸地域を含む支那の廣汎なる産業地域は、
その政治的行政區域と可及的に一致せしめる事が今日最も肝要であり、かゝる觀點に立脚したJ・L・バック
は、その基本的農業を主眼として夫々、自然植物、氣候、土壤、作物、種族、市場への巨離、土地、飢饉災害、
家畜、農業經營規模、農業勞働力、生産、榮養、生活程度、人口等の如き自然的社會的主要因子により、全支
那國土を八區分⁶⁾してゐるが、クレッシイも亦その環境要素の分析と文化型及びその分布性より、地形、氣候、地
質、植物、その他資源を基礎として概活的に地理學的十五區分⁷⁾を行つてゐる。尙ウキットフォーゲルも亦支那本
部十八省は一系列の自然的な大農業地域中に構成されてゐるとなし、この大農業地域について如つておくこと
は、支那の經濟的・社會的及び政治的發達の理解上最大の重要性と看做し、就中支那本來の性格たるべき灌漑

農業を基礎として、次の如く全土を五區分してゐる。即ち(1)西部及び北部の國境地域、(2)本來の北支那、(3)亞熱帶的中支那、(4)熱帶的の南支那、(5)西南支那の『蠻民』の諸省、而して之等の區分確立は、何れも新支那經濟地理學上その劃期的な貢獻をなしてゐる事は今更に言を俟つ迄もない事であらう。斯くして支那は、その本來的な意義に據るべき農業的な地域區分に基いて、茲に鑛工業的分布を決定せしむる事は寔に正しい事であり、例へばかのバックの區分に基く冬麥粟區に屬する鐵、石炭、揚子江流域一帯を占める揚子江水稻小麥區の鐵、石炭、四川水稻の鹽、石油、石炭、西南水稻區の錫、銅、亞鉛、水銀、南方の水稻二毛作區に屬するタングステン、水稻茶區のアンチモニー等の埋藏資源を中心とする工業區分も亦想像される事とならう。

ともあれ、現實の事情として、支那に於ける今日の工業地域全般は、今尙ほ極めて非科學的な無計畫な而も恣意的な配置を有し、夫に依つて蒙るべき不利不便も亦甚大なるものがある。更に之に加ふるに周知の如き國內政治の混亂と舊き傳統の墨守とが、伸びゆく進歩的な芽を摘み取つてゐる事は明らかであらう。故に吾々は先づ以てこゝに適正な工業立地理論の立場から、支那そのものゝ工業狀態を考察し、よりよき計畫性の下に工業地域を配備し、以て國土計畫と密接な關聯を保つべき所謂適地適業の理に従つてゆく事を念願したのである。かくてこそ始めて、支那の地域的近代工業化の實現も亦可能となつてくる。

次に、主として資源的に觀た支那は、その良好な立地條件より、將來重工業並びに化學工業の發展すべき餘

地大いにありとはいへ、當面の問題としては、既に昭和十五年十一月五日、内閣情報部によつて公表された日滿支經濟建設十ヶ年要綱の基本方針¹⁰⁾に従つて、支那は特に日滿と協力し、その資源を開發し、經濟を復興し、交通の發達、物資の交易の圓滑、重要産業及び資源の開發を計り、東亞共榮圈の確立に寄與すべき分業的な任務を遂行せねばならぬことは言ふまでもないところである。

ともあれ、支那の近代工業化が、その藏する豊富な資源の故に直ちに可能なりとし、併せてその發展性の膨大さを遽かに計慮することは、確かに早計淺慮にすぎると思はれる。成程支那には周知の如き鐵、石炭、石油、棉花、小麥、煙草、鹽、アンチモニー、タングステン、マンガン、桐油、水銀、銅、錫、鉛等種々なるものの存するのは事實であるが、凡そ此等一切の資源の存在は、その自然的な在り方と社會的條件の檢討の後に於いて、始めて有効に活用せらるるものなのであるが、例へば支那の交通輸送力の現狀についてみると、現在凡そ海岸から百斤以上の奥地鐵鑛石は、そのコストの關係上廣く活用出來ぬ有様にあり、單にそれらは一方にのみ小さく利用されてゐるにすぎず、又その食糧にしても、年來豊收で餘分の糧食が奥地に充満し、農民は價格の暴落に困り抜いて居るにも不拘、沿海諸省は洋米に飢を凌ぐ情況にあり、特に邊疆各省に到つては貯藏米が腐敗して食用とならず集めて此を焚く事情にある。

又、他方、米國中部から上海迄麥一噸を運搬してくるコストは、税金運賃を込めて三十元にすぎぬが、陝西省中部から同じく上海まで麥一噸を持ち來るコストは、實に百四十五元の巨額に上るものと謂はれてゐる。¹¹⁾か

の交通不便で餘りにも有名な抗戰基地四川省は、その面積殆ど日本に等しいにもかゝらず、唯石炭輸送目的の僅か一六・五籽の輕便鐵道を除けば全く鐵道は無く、そこには昔からの所謂人力運輸が行はれ、例へば重慶成都間わづか四四〇籽足らずの行程を、之によつて約十日を要し、尙自流井の鹽を重慶まで輸送すべく一ヶ月を要し、時には二三月をも費す有様にあり、特に現在、蔣介石が軍需資源活用のため、その交通建設、殊に自動車輸送の擴充實現に狂奔しつゝあることも成程と頷かれる譯であらう。

かの工業立地論を始めて體系づけた學者として餘りにも有名なA・ウェーバーが、その運搬費¹⁴⁾を以て工業立地最大の主要因子と看做しつゝ、特に彼は一定の工業が最も有利に營まれる地點の決定こそは、その原料地と消費地の原料及び生産物の「ウェイト」に相應する力によつて、互に牽き合ふ場合、その均衡點に決着するものとしてゐるが、その牽引力こそ右の運搬費に外ならぬのである。斯く考ふる時、現在支那の埋藏資源はその將來的有望性を示すものとはいへ、未だ殆ど未開發、未活用の状態にあり、今後更に交通建設、資本擴充、調査徹底、技術向上等から一層その開發を進めねばならぬことを覚えてくる。

假にも東亞の指導盟主國を以て任ずる我國は、そのより豊かな資本と優秀な技能力を傾けて、東亞の國防的見地に立脚しつつ、支那資源の開拓活用に邁進すべきことは勿論であり、まさに之こそは現下最大の緊急課題なりと稱しても決して過言ではないのである。

最後に、その勞働力についてであるが、支那の近代工業化について最近多くの人々の謂ふが如く、支那勞働者の低能率に對し、その改善の急務並びに技術教育の強化等は、極めて同感な問題であり、茲に支那人一般の教養について説かれる一二の例を以てしても、特にその基礎的一般教育向上の要務を痛感させられるのである。即ちJ・L・バック¹⁵⁾はその教育調査の報告書中、僅かに男子の三〇%及び女子の一%のみが普通の文章を読み得る程度の學校教育を受けてゐると云ひ、かのハンス・クリューゲル¹⁶⁾も亦、支那青年問題を論じた一節に於いて、支那の文盲の數は勿論概算だが、少くとも國民全體の七〇%以上に上るであらうと記して居り、更に之等と關聯して、特に支那近代工業を代表すべき紡績工場の勞働者につき、之を具さに觀察せる一識者によつて、「支那人紡績工の現状は何うであるかと云ふに、支那の職工は、日本の職工に比して仕事上常に劣つて居る。是は職工教育及び機械教育的知識の普及しない結果に依るが、又職工の品性について、支那の職工は歐米及び我國のそれに比較して大いなる遜色がある。例へばその九〇%は賭博を娛樂とし、且つ盜癖を持つてゐることである。又支那の紡績工は、概して機械の取扱及び製造技術に對する注意力にも乏しいのと、時間の觀念がなく、怠惰で忠實を欠いてゐる者が多く、職工中文字を解するものは男工百人中一割乃至二割、女工は百人中二、三人にすぎない状態である¹⁷⁾」——と述べられてゐる有様である。

由來支那民族の一大欠陥として、その組織と規律と迅速さの乏しい事が擧げられてゐるが、¹⁸⁾まさしく夫等は政治的不統一下にある國情の正しき反映たると同時に、一面支那本來の農業的性格を持つ國民性そのものの如

實なあらはれにすぎないものと思はれる。斯くて單なる外來的、侵入的、いはゞ西歐的な色彩を持つ所謂近代工業化について、それらに従事する支那労働者の種々なる貧しさに對し、之を一概に非難攻撃することは、全くその本來の支那的性格を考へぬ皮相な見解と評されるのもあながち不當なことではあるまい。たしかに興味深い言葉と思はれるが、トーネーはその著の中に、「西歐的なものを作るとき支那職人のづぼらさ加減に比べて、支那人の生活から生れた、その天稟の才能によつて作られた品物の驚嘆する程の精巧さは、實に不可思議なる對照なのである¹⁹⁾」——と記してゐる。故に吾々は、それら支那人労働者の非能率性を、唯怠惰とか無氣力とか不注意とかと詰る前に、もつと彼等を激しく訓練し養成すると共に、益々その才能を發揮すべく磨いてやらねばならぬのである。そこにおのづから、曹鐘瑜²⁰⁾も述べる如く、支那人特有の根強い舊慣墨守も、みづからの手で粉碎し瓦解し自滅せしむることさへ、あり得るものと思はれるのである。

而も他面、支那人本來の工業的な素質について、かのウキットフォーゲル²¹⁾は、極めて樂觀的な意見を述べて居るのである。即ち労働する支那人の生理的ニ知識的狀態から、彼が近代工業的機械生産に入り込んだ時にでも、極めて有利な仕方で作業を続けらるべく、又支那人は機械技術のむづかしいこつの會得につき、之を均一的不斷の反復により、間違ひなく成し遂げ得られ、いはゞ善良の機械工となり得るものとしてゐるが、A・パース²³⁾も亦、支那人職工の教育し易き事實を述べ、近代的に訓練された支那職工は、殆ど教育された日本工場の労働者に何等劣らないことを強調して居り、尙モール教授²⁴⁾も亦、特にそのフランス農民と

比較して、一般に技術的な改良に對する前者の懐疑的なのに比し、支那人の特に技術的改良についての好奇心の強さ激しさを發見したと述懐して居る如くである。

抑々支那近代工業化に對する勞働力の殆どは、その本來的な農業的性格に基く農村からの供給であり、吸収たることは、例へば支那近代工業化の中心をなす上海の勞働者請負組織²⁵⁾や、フォング博士の調査に基く上海勞働市場の狀況²⁶⁾を眺めても、既に明白な事實なのである。故に、「支那の農業的生産の特殊性を迂回して反映する所の、その政治的要因を、支那の工業（及び商業）の觀察に當つては、つねに眼中に置く事が必要欠くべからざること」²⁷⁾なのであり、その歴史的に特質づけられた農村封建性が、今尙近代工業化に對しても濃厚に存すべき事實を見逃してはならぬのである。

斯くして吾々は、不斷に支那工業の勞働力を裏付けるべき、その農業的な關聯性を識り得ると共に、つねにそれらの特殊的關係から眼を離してはならぬ事となる。寔にリヒトホーフエンによつて、「粘り強い根氣と極端なる忍耐」²⁸⁾を持つ勤勞と呼ばれ、而も「全く安價な、だが聰明な人間勞働力」²⁹⁾と謂はれる特長を持った支那勞働者が、永き過去百年に亙る西歐的搾取の魔手より全く脱却し、今やそこに自力を以て眞に民族独自の近代的工業の興起に邁進しつつあることは事實であり、その有望な將來性を思はしめるものが極めて多いのである。

(1) R. H. Tawney, *ibid.*, pp. 126—127.

(2) グルーシャコフ既掲書 六四—六五頁。

- (3) G. B. Cressey, *China's Geographic Foundations*, New York 1934, p. 131.
- (4) M. H. カチーニハ 田田 「*支那の農業地理*」 一六二—一七五頁。
- (5) 農林部 第七十二號 (昭和十六年七月) 「*支那の農業地理*」 參照。
- (6) J. L. Buck, *Land Utilization in China*, Nanking 1937, *Chapt. II*, pp. 23—91.

Wheat Regions :

Spring Wheat Area

Winter Wheat-millet Area

Winter Wheat-kaoliang Area

Rice Regions :

Yangtze Rice-wheat Area

Rice-tea Area

Szechwan Rice Area

Double Cropping Rice Area

Southwestern Rice Area

- (7) G. B. Cressey, *ibid.*, pp. 158—394.

The North China Plain, The Loess Highland, The Shantung, Liutung, Jehol Mountains, The Manchurian Plain, The Mountains of Eastern Manchuria, The Khingan Mountains, The Central Asiatic Steppes and Deserts, The Central Mountain Belt, The Yangtze Plain, The Red Basin of Szechwang, The South Yangtze Hills, The Southwestern Tableland, The Southwestern Coast, The Hills of Liang Kwang, The Tibetan Borderland.

- (8) K. A. Wittfogel, *Wirtschaft und Gesellschaft Chinas*. Leipzig 1931, S. 224.
- (9) 米倉二郎著「東亞地政學序説」二〇六—二〇七頁。
- (10) 週報二一四號(昭和十五年十一月十三日)二〇頁。
- (11) 編譯彙報第七十一編(昭和十六年八月)「支那の戦時經濟問題」六六頁。
- (12) 編譯彙報第二編(昭和十五年二月)「四川攷察報告書」一七一頁。
- (13) G. B. Cressey, *ibid.*, pp.320—322.
- (14) C. J. Friedrich, *Alfred Weber's theory of location of industries*. (English edition) Chicago 1929, p.41.
- (15) J. L. Buck, *ibid.*, p. 373.
- (16) 東亞問題 昭和十六年一月號 十八頁。
- (17) 宇高寧著「支那勞働問題」九六—九七頁。
- (18) 編譯彙報第七十一編(昭和十六年八月)「支那戰時經濟問題」七一頁。
- (19) R. H. Tawney, *ibid.*, p. 114.
- (20) 編譯簡報第二年第三號(昭和十七年三月)曹鐘瑜著「支那工業發展遷延の原因」六七頁。
- (21) K. A. Wittfogel, a. a. O. S. 151.
- (22) F. v. Richthofen, *China*. II. S. 694.
- (23) G. E. Hubbard, *ibid.*, p. 206.
- (24) *Cit.* nach K. A. Wittfogel, a. a. O. S. 139.
- (25) *Cit.* nach G. E. Hubbard, *ibid.*, p. 209.
- (26) *Ibid.*, p. 206.

支那近代工業化を繞ぐる諸問題(横田)

- (27) K. A. Wittfogel, a. a. O. S. 510.
 (28) F. v. Richthofen, a. a. O. S. 694.
 (29) Ebenda S. 694.

四

東亞共榮圈の將來的課題の一つとして、期待すべきものは、矢張りその躍進的工業の姿であり、新理念に基づく共榮圈全體の綜合統一的工業近代化の實現でなければならぬ。斯る立場からしても、從來に於ける恣意的にして非科學的なものより、共榮圈全體をば統一的に合理化し結合せしめ、以て相互に有無相通じしめる工業自給圈の實現を目標とする、その建設計畫が儼然と樹立さるべきであり、例へば過般公表せられた、かの日滿支經濟建設十ヶ年要綱の基本方針の如きも、之等のことを明瞭たらしめて居るのである。故に今日の情勢に於ては、最早獨り支那のみの恣意的行動は許されず、常に共榮圈全體に對する支那的立場に於て正しく考慮されねばならぬことは勿論であらう。斯くして從來、往々にして西歐的なものに眩惑依存し追慕さへし來たつた支那經濟そのものに付き、今改めて之を反省し、要すれば根柢より其等を拂拭し、以て新しき出發への再編成、再考慮を確立すべきことこそ最大急務と謂はねばならぬ。茲に於て吾々は、我が日本を中核とする共榮圈全般の工業的立地構想につき、例へばかのチューネンがその高著「孤立國」¹⁾に於て示せる如き、所謂環狀立地圖形の

理を應用的に當徴める事によつて、その適正配置を想察するならば、即ち共榮圈の中樞たるべき我が日本に於て精密機械、化學各工業等を確立せしめ、之を圍む滿洲國に鑛業、電氣事業、従つて將來的重工業及び化學工業化への素地を建設せしめ、更に支那については、鑛業、製鹽業及び纖維工業を立地し、最後に南方諸地域については、主として食料、原料等の原始産業を配置する事も亦可能となるのである。

然し乍ら之等の立地構想が、單に理念上の問問としてのみ計畫されることには、幾多の危險が伴ふべく、より合理的に而も現實的に之を行はんがためには、矢張りそこに、緻密にして周到な、而も明確な理論的根據が求められなければならぬのである。而して之こそは、所謂東亞全般を打つて一丸ともすべき國土計畫そのものの基礎原理をなす、かの工業立地理論²⁾でなければならず、それはあく迄も、立地理論の本質に従つて、土地の最適利用を基本となし、「如何なる工業を如何なる土地に立地せしむべきか」を、最も合理的に決定せしむる一つの理論なのである。而して右の立地理論が構成せらるべき要素たる、所謂立地因子に付き、大概ねその立地上の費用利益に關聯を有つ、社會的經濟的因子として、原料、補助材料、動力、勞働力、製品關係、交通關係、消費市場、資本金融關係、利子、土地關係、地代、租稅、保險料、水道料、社會的負擔、經營手腕、社會秩序、經濟政策、國家政策等が擧げられ、又立地位置そのものの價値に基くものとしての自然的因子として茲に、氣候、地勢、地質、河川、湖沼、海洋、水、資源等を述べる事が出来る。而して之等は、一面に於て、その最適地工業を發見すべき、自然地理的、社會地理的、經濟地理的、國防地理的的特殊性の立場から、而して他面

に於ては、その最適工業發見としての技術的、社會的、經濟的、國防的特殊性の立場より、夫々正しき相互關係の中に、最も合理的に且つ計畫的にせしめつつ、その立地決定が行はるべきなのである。

唯茲に極めて注意すべきことは、今日の歴史的階梯にあつて、所謂立地そのものの根本的意義が大いに變革され、従來に於ける立地空間そのものは、所謂自由主義的、恣意的な個別的利潤追求の場として、その角逐的姿がとかく放任され勝であつたが、今やそれらは全く一變し、いはばその統制主義下に、論理的な經濟價值實現の場として、民族と國家とに固く結びつけられ、眞に國防的な國土としての立地的價值にまで昂められる事となつたのである。故に最早従來に於ける如き、恣意的、放任的、選擇自由の個別的な立地から、眞に総合的な、適地適業の理に根ざして、廣く公益的な倫理性を持つ統制的、計畫的立地にまで移行し革新されるに到り今日屢々見らるるが如く、その個別的な營利性を無視して以て、廣く國防的な見地から、その最適配備を標榜せんとする非營利的な工業立地も亦、敢てなされる現況にある譯なのである。

以上の如き工業立地理論を前提として、然らば將來的支那近代工業化はその立地上、如何に考究さるべきであらうか。この提問に對して吾々は、先づその現實的な内面の大きな問題として、特に支那そのものの民族近代工業の興起に、注意深き眼を向けなければならぬことを覺えてくる。即ち、従來に於ける民族工業は、主としてその農村工業や、奥地小規模工業を形成せるものに過ぎねが、之等を如何にして育成伸長し、更に我が高度工業と如何に有機的に結合せしむべきかが深く考へられねばならぬのである。たとへ共榮圈全體の工業的立

場が、その國防乃至基礎工業の現出を強く標榜するものであつても、遽かに夫々の國情や歴史的背景を無視して以て、卒然と之に高度工業を移植せんとすることは、いはば無謀以外の何物でも無く、決して所期の成功を納めるものではない。そこに夫々の適正な有機的結合が肝要となつて來る譯であり、特にこのことは、支那にとつても妥當なことなのである。とまれ、支那は、矢張りその本來の性格に基く農業的なものの上に独自の工業を伸長發展せしめる事は自然なことであり、いはば農業の工業化問題としての輕工業から先づ着手すべきことが正しいのである。而も從來に看るが如く支那の工業は、殆ど紡織、製糸、製粉等の輕工業に限られ、且つその發展の根據も亦農業と密接なる關聯を有して居り、従つて支那は、その農業を代替離脱して、國民經濟を完全に工業の上に建立することは絶対に不可能なこととなつてくるが、尙既述の如き、その工業勞働力源泉地たる農村の意義に於ても亦、一層所謂支那農業と工業との固有な有機的關聯性の把握の必要を茲に痛感せざるを得ないのである。

然し、右の如き考察にも不拘、支那の近代工業化が、とかく外來的、侵入的西歐諸國の強制壓迫に基く形式的なものになつて居る以上、そこに多くの矛盾と危險を孕み、例へば一方に大規模機械工場制工業の大いなる發展にも不拘、他方には舊態依然として幼稚極はまる手工業、家内工業及びマニユファクチュアが存するといふ如き奇觀を呈してゐるが、之等はすべて、支那本來の性格に基く自然的な産業革命なき、いはば不自然な近代工業化に據るべき結果に外ならぬのである。故に斯る點を改善し、從來の欠陥を一掃すべきことは、今日ま

さにその急務とすべく、特にそれらに對する民族的な眼を大きく開かせることは、結局その民族自體の中よりおのづから盛り上つてくる剛き力を以て、自己自身の産業革命を行ひ、以て實質的な眞の近代工業化を招來せしめることともなる意味に於て、斯る根本的な目標に對する、共榮圈全體の協調的な努力援助が切に肝要であり、就中東亞の指導國を以て任ずる、我が日本自身の双肩に負荷されたる大きな責務といはねばならない。

(1) Thünen, J. H. v., *Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie*. Jena 1826. Dritte auflage, Jena 1930.

(2) A. Weber, *Ueber den Standort der Industrien*. Erster Teil. *Reine Theorie des Standorts*. Tübingen 1909.

C. J. Friedrich, *Alfred Weber's theory of the location of industries*. Chicago 1929.

川西正鑑博士著「工業立地の研究」參照。

(3) 工業組合 第四卷第三號 拙稿「工業立地決定の理論と實際」參照。

(4) 支那新式工業創設後の光緒一一年には上海租界内の人口は一二五、六六五人なるにも不拘、同二一年には二四〇、九九五人といふ殆ど倍餘の増加を見る實情となつたが、之等はすべて農村よりの流入である。(南支那及南洋調査第百六十三輯「支那最近の工業並に財政」八八頁參照)

尙支那工業勞働力の源泉地としての支那農村問題については、拙譯「支那工業勞働問題の一般的特質」(興亞之工業第七卷五月號)及び同じく拙譯「支那再建に關する農村工業の問題」(農村工業第八卷第二號)參照。